

難波宮跡出土の「宿世」木簡について

福 山 敏 男

大阪市東区広小路町の広小路公園造成予定地で、大阪市教育委員会と難波宮址顕彰会によって、昭和49年10月1日から開始された発掘調査(難波宮第66次)で、東西方向の主トレンチに直交する2本のうちの西の枝トレンチの西南隅で、長方形(東西約4m、南北約3.5m、深さ2.5m)の掘込みが発見された。この掘込みの北・東・南の急傾斜する3壁面に各1所ずつ柱跡のような凹みがあって、もと何か構築物があったと思われたことから、「方形遺構」とよばれるようになった。

この方形遺構では構築物を除去した後に埋土が施されたようであり、埋土はその包含する土器などの遺物によって、上中下の3層に区分された。その下層から、昭和50年1月9日に、古代の木簡と木簡の削屑が出土した。下層の土器の編年は「難波宮下層」にほぼ相当し、「やや新しい様相も認められるがほぼ7世紀半ば以前とみられる」ということである。

以上は八木久栄「第66次発掘調査概要」(『難波宮跡調査年報 1974』難波宮址顕彰会1976年3月編集・発行)によって問題の木簡の出土した状況の概略をのべたものである。

この木簡は長さ現存部18cmで下部は折れて失われ、幅約6.5cm・厚さ0.9cmであるという。1面には「廣乎大哉宿世」と墨書した後に、字面中央に淡墨で1本の縦線をひいて抹消してある。裏の面には「是以是故是是」と墨書してあるが、これは習書とみられる。削屑には「春」「慰」「定」などの文字が判読できるというが、前記の『調査年報』には削屑の写真などは載せてなく、残念である。私もこの削屑の実物19片を見せてもらったが、全画を保つ文字はなく、1字も確実に判読できなかった。

狩野久『木簡』(『日本の美術』第160号、至文堂、昭和49年9月発行)では、挿図第36—37図でこの木簡をとりあげ、その年代を前記『調査年報』に従って7世紀中葉を下らないもの、或いは難波宮造営以前(7世紀前半)とし、その「書風も古様をとどめ、出土状況の年代観と矛盾しない。……現在までのところ、これが最古の木簡とみられる」としている。今でも日本最古の木簡の一つと目されている。

この木簡の字句の主要な語は「宿世」である。「宿世」の語は中国の経書などにはあられず、字書類によると「前世」を意味する仏教用語とされている。従って、木簡に見る

「廣乎大哉宿世」という字句は仏教関係者によって書かれたものとすべきであろう。おそらく何らかの手本を傍に置き、それを見ながらこの字句を書いたと考えるのが普通であろう。そこで私は『大正新脩大藏經索引』の一部や『望月仏教大辞典』、中村元『仏教語大辞典』などの辞書から仏典に見える「宿世」という語例を拾ってみた。

後漢の外国三藏康孟詳訳『興起行經二卷』（一名嚴誠宿縁経、一名十縁経）卷上の冒頭の偈のうちに、

智慧舍利弗 起問於世尊 世尊無双比 無事不見聞
世尊先自説 宿世諸因縁 （孫陀利） 孫陀生惡謗 望得其敬事
（世尊）
無故誹謗尊 此是何因縁

の句がある。この偈の次にある「孫陀利宿縁第一」には「佛語舍利弗，汝觀如來，衆惡皆盡，諸善普備，能度天龍・鬼神・帝王・臣民・蠅飛・蠕動，皆使得無爲安樂，雖有是功德，猶不免於宿縁」と記してある。また同書同卷の「骨節煩疼因縁経第四」には「於是佛説宿縁，頌曰」として「我往爲醫子治於長者兒 瞋恚与非藥 由此致無常 以是宿因縁 久受地獄苦 …… 我自成尊佛 得爲三界將 故説先世縁 阿耨大泉中」とあり，その次に前記の「孫陀利宿縁第一」の末文と似た文章で「佛語舍利弗，汝見如來，衆惡已盡，諸善普具，欲使天龍・鬼神・帝王・臣民，皆念其善，猶有此縁，況復愚冥未得道者」と記してある。さらに同書卷下の「食馬麥宿縁経第九」にも同類の文章があって、

佛語舍利弗，汝觀如來，衆惡已盡，諸善普具，諸天龍神，帝王臣民，一切衆生，皆欲度之，尚不能得免宿世餘殃，況愚冥未得道者，

と書いてある。以上の文を通覧すると、「宿世因縁」「宿因縁」「宿縁」「先世縁」「縁」「宿世餘殃」が大体において同義語として用いられている。古代の中国では、「宿」には「久」や「旧」の意義があったから（『経籍纂詁』卷90，入声一屋），前世・先世のことを「宿世」と書き，サンスクリットの pūrva の訳（『望月仏教大辞典』3）としたのであろう。康孟詳が諸経を訳したのは後漢末の建安年中（196～220）であった（常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』533頁）というから，この『興起行経』もそのころの訳出であろうか。ただし，現行本が後漢時代の用字を忠実に守ったものかどうか，多少の疑問がないわけではない。

次は三国魏の嘉平4年（252）に外国の僧康僧鎧が洛陽で訳出したという『無量寿経二卷』の卷上に、



第1図 「宿世」木簡（表）

阿難白佛，…貧窮乞人…皆坐前世不殖德本，
 …所以世間帝王・人中獨尊，皆由宿世積德所致，
 …積善餘慶，今得爲人，自然尊貴，
 とあり，ここでは「前世」と「宿世」が同義に用いられてい
 る。同書卷下には，世尊の説いた頌のうちに，

僞慢弊懈怠 難以信此法 宿世見諸佛 樂聽如是教
 とある。ただし，常盤大定氏(前掲書591,944～5頁)はこの『無
 量寿經』は康僧鎰訳ではなく，南朝宋の永初2年(421)に宝
 雲が訳した『新無量寿經二卷』とする説を出している。

次は西秦の太康7年(286)に竺法護が訳したとある『正法
 華經十卷』である。その巻第一「善權品」の頌に，

從其宿世 各得報應

とある。同書卷第五「授五百弟子決品」に「追省往古所興
 立行」とあり，卷第十の「光世音普門品」の頌に「前世行中
 正 加施人平等」とあり，「淨復王品」の本文に「於是淨復
 王，……是二子者，示現子像生我家耳，皆是宿世明識本德，
 承弘仁慈，……佛告王曰，……王今寧見此二太子，是諸族姓
 子，前世已曾供養奉事六十五億百千兆姪江河沙等如來至真，而後受持是正法華經」とあり，
 仏の頌に「前世行中正 加施人平等」とある。ここでも，「宿世」「往古」「前世」が同義
 語となっている。

同じく竺法護が訳した『濟諸方等學經一卷』には，

佛語阿逸，仁本宿世，具六十劫，行檀波羅密，尸羼惟逮所修禪定，般若波羅密亦如是，
 とある。

後秦の弘始8年(406)に鳩摩羅什が訳出した『妙法蓮華經八卷』には「宿世」の語が7
 所に用いられている。巻第二「信解品」の偈の「隨諸衆生 宿世善根」，巻第三「藥草喻
 品」の偈の「我及汝等 宿世因緣」，「化城喻品」の偈の「佛知童子心 宿世之所行」，「授
 記品」の偈の「我及汝等 宿世因緣」，巻第四「五百弟子受記品」の「復聞宿世因緣之事」，
 巻第六「隨喜功德品」の「若我於宿世」，巻第八「妙莊嚴王本事品」の「此二子者，是我善知
 識，爲欲發起，宿世善根，饒益我故，來生我家」の例がそれである。『正法華經』の「往
 古」「前世」などの語が，ここでは「宿世」の語に統一されている。

宋の永初2年(421)に仏陀跋陀羅が訳した『大方廣仏華嚴經四十卷』の巻第一「世間淨眼
 品第一之一」には「与如是等諸菩薩俱，皆是盧舍那仏宿世善友，一切成就功德大海」とある。



第2図 「宿世」木簡(裏)

梁の慧皎の『高僧伝』巻第三(訳経下)の「求那跋摩伝」には「(王)母因勸王曰、宿世因縁、得爲母子、我已受戒、而汝不信」とあるが、同じ巻の「求那跋陀羅伝」には「但不因宿縁、乃逢此事」「汝宿縁在此、我今起寺」とあり、やはり「宿世」と「宿縁」を同義語として使用している。

陳の天嘉6年(565)に月波首那が訳した『勝天王般若波羅密經七卷』を見ると、巻第二「法界品」に「菩薩摩訶薩、宿世智慧力故」とあり、同巻「念処品」に「多諸功德、宿世所種、善根力強、具足善因」とあり、巻第三「法性品」に「衆生各有宿世善業」とあり、巻第四「現相品」に「復有天人、宿世善根、深樂大乘」とあり、巻第五「現化品」に「諸佛宿世、願力清淨、故能如是」とある。

隋時代に天竺の闍那崛多・達摩笈多共訳の『添品法華經七卷』の巻第二「信解品」の偈の「隨諸佛衆生 宿世善根」、巻第三「化城喻品」の偈「佛知童子心 宿世之所行」、巻第六「常不輕菩薩品」の「我於宿世不受持読誦此經爲他人説者」、巻第七「妙莊嚴王本事品」の「此二子者是我善知識、爲欲發起宿世善根饒益我故、來生我家」とあるものは、多く『妙法蓮華經』の文によったものであり、とりたてて注目すべき点もない。

天台大師智顗(隋開皇17年<597>没)の『六妙法門』には「次釋第十証相六妙門、……二者宿世業縁善根發、是故互發不定」とある。

隋から初唐にかけて活動した僧灌頂(智顗の弟子)の編集した『国清百録四卷』の巻第三「王論荊州諸寺書第五十二」は晋王広(後の煬帝)が開皇11~13年<591~3>ごろの書状と思われるが、「弟子総持和南、荊州玉泉・十住両寺、近既賜令檢校、當勒所由終聽僧使、奢促弟子仰蒙淨戒、宿世因縁稍希義理、智波羅密爰降開許、始制義疏、……謹和南、七月十七日」とある。

尊者世親の作、三蔵法師玄奘訳『阿毘達磨俱舍論三十卷』は唐の永徽5年(654)に成ったもので、その巻第九「分別世品第三之二」に、

論曰、……何縁如是三品不同、由業智俱如次勝故、第一業勝、謂轉輪王、宿世曾修廣大福故、第二智勝、謂獨勝覺、久習多聞、勝思擇故、第三俱勝、謂無上覺、曠劫修行福智故、除前三種、餘胎卵生、福智俱劣、合成第四、此中外道、執我者言、若許有情、轉趣餘生、即我所執、有我義成、今爲遮彼、頌曰、……

とある。

同じく玄奘が竜朔3年(663)に訳し終った『大般若波羅密多經六百卷』の巻第三百「初分離聞功德品第三十四之四」には「時舍利子復白仏言、……若得聞此甚深般若波羅密多、受持読誦、如理思惟、深生信解、當知宿世善根成熟、多供養佛、多事善友、不久當受大菩提知」とあり、巻第四百二十九「第二分天來品第三十四之一」には「唯除宿世定惡業因現在

應熟」とあり、卷第四百三十八「第二分東北方品第四十三之一」には「時舍利子白佛言、……若得聞此甚深般若波羅密多，受持誦誦，如理思惟，深生信解，恭敬供養，当知宿世善根成熟，多供養佛，多事善友，不久當受無上大菩提記」とある。

唐の善導(681没)編集の『往生礼讃偈』や『集諸経礼懺儀』卷下には「至心歸命(礼)西方阿弥陀佛 宿世見諸佛 則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜 願共諸衆生 往生安樂國」の偈がある(後者には「礼」一字がない)。

このころから後の資料は、問題の木簡より時代が後れるから、省略する。

以上列举した資料を通覧して、問題の木簡の文章と関係のありそうなのは、654年の玄奘訳の『俱舍論』に

第一業勝，謂轉輪王，宿世曾修廣大福故，

とある部分ぐらいしかない。木簡の「廣乎大哉宿世」の文章は、俱舍論のこの句を見て、または敷衍して書いたように思われる。『俱舍論』の講読のとき、講師が転輪王(つまり帝王)の宿世をほめたたえて、このような言い方をしたとも考えられよう。

一方、『日本書紀』によると、白雉3年(652)年4月15日、内裏で『無量寿経』を講ぜしめたとある。この時の法会に関する木簡ではなかろうかとも考えられよう。しかし、この場合は玄奘の『俱舍論』訳出よりも2年も早い点に『書紀』編年などの天皇の問題が生ずる。

それとは別に、前記のように、『無量寿経』卷上には「所以世間帝王人中独尊，皆宿世積徳所致，……積善餘慶，今得爲人，遇生王家，自然尊貴」の句がある。この文中の「宿世」は善惡二者のうちの善の方であるから、講師は天皇の「宿世」をほめたたえて「廣乎大哉宿世」と言ったとしてもよからう(因みに「積善餘慶」は『周易』『坤』の「文言」が出典である)。

今のところ、私はここにのべた二つの場合を考えている。大蔵経のうちに、一層適切な文章があることに、今後気付くかもしれない。それまでの、一応の試案として、年来書き集めた私のメモをまとめてみたわけである。

因みに日本の文学書では、「宿世」を「すくせ」と訓み習わし、10世紀半の『伊勢物語』をはじめとして、同世紀後半の『宇津保物語』や『蜻蛉日記』、11世紀では『源氏物語』『更級日記』『栄花物語』、12世紀では『大鏡』に散見し、保安元年(1120)以後まもなく成立したとされる『今昔物語集』に多数使用されている。そのころが「宿世」の語を日本人は日常に使用した時期であろう。

なおこの木簡の裏面の「是以是故是是」について一言しておこう。「是以」「是故」はいわゆる虚字で、常用語である。

『尚書』牧誓に、周の武王の牧野における誓のことばのうちに、「是以爲大夫卿士」とする句が「是以」の古い例のようである。葉紹鈞編『十三經索引』や顧頡剛主編『尚書通檢』によると、『尚書』中の「是以」の用例はこれ一つである。

『論語』では、前記の『十三經索引』や楊伯峻『論語訳注』(1956年自序)によると「是以」は3例、「是故」は2例あるという。『論語』「公冶長第五」に「子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也」とあり、「先進第十一」に「子曰、是故惡夫佞者」とあるのが両者の1例である。

『孟子』では、『十三經索引』や楊伯峻『孟子訳注』(1960年刊)によると、「是以」の用例13、「是故」の用例15となっている。『孟子』の「梁惠王章句上」に「孟子対曰、仲尼之徒、無道桓文之事者、是以後世無傳焉」とあり、「梁惠王章句下」に「齊宣王問曰、交鄰國有道乎、孟子対曰、有、惟仁者爲能以大事小、是故湯事葛、文王事昆夷」とあるのがその例である。

漢代から後の例は一々挙げるのを省略しよう。孔穎達の『毛詩正義』卷第一に、『毛詩』の国風の周南の「關雎」序に「是以一國之事、繫一人之本、謂之風」とある文について「是以者、承上生下之辭」と説明し、後漢の鄭玄『詩譜序』の「周南・召南譜」に「是故、二國之詩、以后妃夫人之徳爲首、終以麟趾」とある文について「是故者、縁上事生下勢之称」と説明している。

王引之『経伝釈詞』(1798年原序)の卷九には「「是故」「是以」、皆承上起下之詞、常語也」とし、『毛詩正義』の説明と同様である。楊樹達『詞詮』(1928年序)は「是」の用法を5種に分類し、その一つを「指示代名詞、此也」として、『史記』「韓信・盧綰列伝第三十三」の「内見疑疆大、外倚蠻貊以爲援、是以日疏自危、事窮智困」の例を引いている。また「連詞、於是也」として、『易』「繫辭上」の「是以明於天之道、而察於民之故、是興神物、以前民用」の例を引いている。王引之よりも考え方が細かくなっている。斐学海『古書虚字集釈』(1932年自序)の卷九には「「是故」、発端之詞也」とし(『易』繫辭伝と『礼記』礼運の句を例示)、「「是以」、猶「故」也、申事之詞也」とし(『韓非子』外儲説左下の句を例示)、また「「是以」発端之詞也」とする(『易』繫辭伝の句を例示)。

(福山敏男=当センター理事長)